

2-09 オールの置き方、運び方

「そのクルー／コーチが、どのくらいボートの扱い方を知っているかを知りたければ、オールの両端とシャフトの摺り傷を見るだけで良い」

1 ブレードを上／下に

- オールは、基本的に、ハンドルを地面にブレードを上に乗せますが、状況によっては逆に置くこともあります。どちらにしても、風で倒れたり、つまずいたりしないように、またハンドル端やブレードの先端が擦れて削られないように、十分注意しましょう。
- オールをむやみにまたいではいけません。大切なもの、敬意を表するものの上はまたがないという伝統と、リスク（砂がスリーブにつく、つまづくなど）の回避のために、です。

2 シャフト

- 特にカーボンシャフトでは、細心の注意を払いましょう。荷重に対して強いシャフトも、表面に小さな傷をつけると、簡単に折れてしまいます。ガラス切りでガラス板を切るようなもので、硬い材質のものは、小さな傷にも力が集中し簡単に折れてしまいます。

3 スリーブ

- 船台などのきれいな床を除き、オールを土や砂の上に直接置くべきではありません。特にスリーブに、砂やほこりをつけないように注意しましょう。
- スリーブはその昔、牛の皮でできていました。そのためフェザー／スクウェアの回転をよくするためにグリスを塗っていました。ビニル製の皮になってもその習慣は必要でした。しかし現代のプラスチックスリーブでは、グリスによって劣化するのでグリスは塗りません。しかしより適切なケアとしては、シリコン系の潤滑スプレーを吹くことです。不要だと考えるコーチもいるでしょう。そのような場合には、どちらか利き手でないほうのスリーブだけ、シリコンスプレーを吹いて漕いで見るべきです。

4 運び方

- オールは、ブレードを（何かに接触させず、よく見えるように）前にして、重心位置で持って運びます。肩に担ぐのは、伝統的に「ぞんざいに扱っている」とみなされ嫌われる姿勢であること、ブレードが、眼の高さに来て周囲の人にケガのリスクを増すことなどから、避けるべきです。（ただし、小さな子どもがいるようなところでは、低い位置のブレードがかえって危険かもしれません。
- 数本のオールを束にして抱えてがちゃがちゃと音を立てながら運ぶのは、まるで、「レースのときに折れますように」と祈っているようなものです。シャフトに微細な傷をつけます。
- 要は、大切に、オールと周囲の両方に配慮して運んでほしい、ということです。